

日本語の話し言葉

秦 明 吾

「わたしさーア、マジで魚は食べれないの」「ウッソー、信じられナーイ」
一。こんなやりとりが当たり前となった“若者言葉”に、文部省の国語審議会から「言葉の乱れ、ゆれ」だとクレームがついている。

こういう「食べれる」「見れる」といった「ら」抜き言葉は正しい日本語なのか。中国で日本語教育に従事している私はずっと困っている。実状のまま教えたら、「乱れている言葉」だと指摘されるし、かといって、教えなければ、生徒からはなんで日本人は「食べられる」を「食べれる」、「見られる」を「見れる」と言うのかと聞かれる。それで、言葉というものは生きたもので、変化するのは当然だ。合理化や単純化は無理もない。「ら」抜き言葉は日本でかなり広く使われているので、使っていい。ただし、日本国際交流基金が年に一回全世界各国でやっている日本語学力検定テストのような場合は「ら」抜き言葉はまだ駄目だと教えた。“乱れ”や“ゆれ”と指摘される「ら」抜き言葉や若者の使っている一部の話し言葉のあるべき姿などを審議する第20期国語審議会が去る平成5年11月24日からスタート。それに伴い、赤松良子文相は22日、45人の委員を発令したそうだ。一日も早く結論的な意見を出してほしい。

言葉が変化するのは当たり前である。日本語でも外国語でも同じである。日本語を習い始めた中国人学生がよく日本語の一部の漢字の意味はどうして中国語と全然違うのか。例えば「湯」は中国語ではスープのこと、「走」は歩

くこと、「娘」は母さんのことである。それは中国語自身が変わったのであって、日本語の問題ではない。中国の古典を読むと、日本語とまったく同じような意味で使われている。また、北京の若者の話し言葉として、「蓋 (gai)」「絶 (jue)」「神 (shen)」「冲 (chong)」「棒 (bang)」「帥 (shuai)」「派 (pai)」「震 (zhen)」などのようなほめ言葉、賛美辞を使っているが、ほとんど辞書にはそういう意味がのっていない。日本語の「ら」抜き言葉は、話し言葉の世界では昭和初期から使われはじめており、第二次世界大戦後は、新聞の見出しなど、書き言葉にも使われた例のあることが指摘されている（中村通夫、1953年、文化庁、1975年）し、内閣総理大臣官房広報室の「国語に関する世論調査」（平成4年）では、「気になる」人は40%、「気にならない」は58%もあるので、そろそろ日の目を見るべきではないかと思われる。

話し言葉とはなにか

「ら」抜き言葉のような話し言葉というものは何か。言うまでもなく、話し言葉は口頭で交際する際に用いられる言語形式であり、音声のある言葉で口や耳を通じて交際する言語形式である。言い替えれば、話し言葉は話す時に使う言葉で、つまり日常会話なのである（書き言葉に近い放送や講義などは別）。ひとり言も話し言葉であるが、それは例外で、それを除くと、話し言葉というものは、その話を聞いてくれる相手—聞き手がいて成り立つのである。ただし、その聞き手は単数もあり、複数もある。複数の場合、特定の多数（座談会や講義など）もあれば、不特定の多数（講演、演説など）もある。不特定多数には、目に見えない不特定多数、例えば、放送などは、聞き手がいるのか、いないのかも分からない場合さえある。

また、話し言葉の性質から考えると、日常会話というようなものとそうでないものとに分けられる。話し言葉の本質は「思わず口にした」とか「われ知らず口走る」とかいうように、直発的、無意識的、感情的性格を持つ。それに対して、書き言葉は意識的、理性的である。

話し言葉の話し手の心理には、浮動的なところがある。だが、書くという行為は、これにくらべて、はるかに意識性が強い。書き言葉は書き手の計算によって構築される。

日常会話でないような話し言葉、例えば、座談会や講義などは、公的の場で、相手を意識し、「構え」て話す言葉である。こういう話し言葉は書き言葉に接近する。たまたま媒体として表現されたとしても、その発想は書き言葉の発想である。

話し言葉の特色

次は病院の応接室でお医者さんのA、Bと患者の娘婿さんのCとの会話の一節である。

A 実はですね、病状は、思ったよりは良くなかったんですよ。

B 第二頸椎^{けいつい}と、その前後の骨に腫瘍が癒着してしましましてね。たぶん悪性腫瘍だと思います。

C するとガンは全部……。

B いや、取り切れませんでした。これ以上とると生命にかかわりますので。

A ま、とれる範囲でギリギリとりましたが……。

B いっときおさめても、また増殖を始めるでしょうから……。

C それじゃ、また手術を……。

A いや、これ以上やっても……。

C 手術できないんですか。

A 無理です。

B これからは、放射線と抗癌剤^{こうがんざい}で……。

C そうですか。どっから転移したかも……。

A ええ、組織検査をしないと、はっきりしたことはわかりませんが……。

C いつわかりますか。

A 20日間ぐらいかかります。

C で、ざっくばらんにお伺いしたいんですが、おやじはあとどのぐらいもつんでしょうか。

A ……。

B いや、その点についてはなんとも申し上げられません。ただ若い人と違いますから、急激に増殖することはないと思いますよ。

A われわれも、万全の処置で手術をしたんですが、最悪のケースになってしまいました。

前の会話を見て、話し言葉の特色のかなりの部分がうかがわれる。

まず、書き言葉の「である体」に対して、話し言葉では「です・ます体」や「だ体」、または「ございます体」という文体を用いる。「だ体」は主に親しい間柄どうし、家庭などの日常会話の場合に使い、「ございます体」は主としてサービス業や特別尊敬な方に対して、ていねいに言う時に使う。前の会話例のお医者さんと患者の親族とのやりとりに見られるように、「です・ます体」は主として交際やビジネスの文体として使われている。「です・ます体」は話し言葉では最も広く使われており、どんな場合にも使えるほどである。教師が講義する時にも使うし、講演や演説の場合にも使う。また、座談会や懇親会、いろいろな社交の場合にも使う。よく「ございます体」を使うサービス業や尊敬の方に向かって、きわめて丁寧に話す場合にも、やはり「です・ます体」をまじえて使うのが多い。私の大学の日本語科の学生は卒業後、ほとんど通訳や旅行社のガイドさんという仕事をやるので、最初から「です・ます体」の会話を習い、一年後、一応は日常会話や交際用のていねいな言い方で話せるようになるのである。

話し言葉のもう一つの特徴はセンテンスが短いことである。前の会話例は相当ていねいな言葉使いをしているにもかかわらず、1センテンスの字数は10数字だけで、ふつうの日常会話では1センテンスが平均して10字以内だという話である。話し言葉がセンテンスが短いのは、聞き手には耳で聞くので、

修飾語が長く、幾つもの単文で構成される複文では正しく把握できないからである。放送などは書き言葉に近い話し言葉であるが、やはり話し言葉に属するものである。話し手は話そうとする内容を書いた上、十分に工夫したり添削したりする余裕があるので、話し言葉の特色をつい忘れてしまう失敗があるのは指摘するまでもない。次は放送原稿の一節であるが、文が長くて、一番終わりまで読まないと、何を言おうとしているのか分からない。

口井さん（保健婦）の受け持ち区域には、駐在所のある役場から8キロも離れていて、細い山道を、途中まで自転車で行き、あとはほとんど徒歩でないと行けない人里離れた寂しい谷間に住んでいる貧しい家庭もあります。

それを次のような3センテンスにしてから大変わかりやすくなる。

口井さん（保健婦）の受け持ち区域には、駐在所のある役場から離れている所があります。そこには、細い山道を、途中まで自転車で行き、あとはほとんど歩いてでなければ行けません。そのように人里離れた寂しい谷間に住んでいる貧しい家庭もあります。

前のお医者さんと患者の親族との会話例もほとんど単文で、修飾語がないのである。話し言葉のセンテンスが短いのは、聞き手によく分かるようにという理由もあるが、話し手自身にもほとんど考えずに話すので修飾語のながい複文をしゃべれないからである。

敬語の多用も話し言葉の特徴の一つである。敬語は大きく分けると、「尊敬敬語」「謙譲敬語」と「丁寧敬語」の三つである。尊敬敬語は尊敬する人の言動をもち上げて、その人を尊敬する目的を果たすのに対して、謙譲敬語は話し手がへり下って言うことによって、その及ぶ人を尊敬するようになる。丁寧敬語は文体の「です・ます」とか「ございます」とかをさすのである。

書き言葉にも敬語を使うが、もっとも多く使われているのはやはり話し言葉である。人間は一年中、人と付き合うし、付き合う人もさまざまで、異なった敬語を使うことをいつも念頭に置かなければならない。えらい人や自分の

ほんとうに尊敬する人に対して使う敬語は真の尊敬の意味があるが、あまり尊敬の意味のない敬語使用、つまりただの目的達成のためとか、或はただの礼儀とか教養、上品さのあらわれとしての敬語使用はたくさんある。例えば、アルバイトをしたいある学生は知人を通じて、えらい方の家をたずねた。その方の奥さんは「お話のことよく分かりました。主人に申して、なるべく早くお目にかかるように伝えましょう。だんだん世の中が厳しくなって、大変でいらっしゃいますことね。わざわざお運びいただいて、恐れ入りました。」と言った。程度の高い敬語は6カ所（底線の付いているところ）も使われているが、別に聞き手の貧しい学生を尊敬するためではない。自分自身の教養の高さや人格の上品さなどを人に見せるためである。サービス業や商売業の敬語使用は、お客さんや取引先の人を尊敬するためではなく、商売の必要からなのである。多くのデパートやスーパーには「ご意見うけたまわり課」を設けてある。そこで働いているある人は「お客さんの苦情訴えに対して、まず徹底的にお詫びする。たとえ、お客さんのミスではないかと思っても、あくまでもこちらが悪いという姿勢を崩さない」と話す。そういうわけだから、詫びる時に、程度の高い敬語を使わなければ、店にとっての神様であるお客さんの不快はおさまらないのであろう。商売上、お客さんはいつまでも正しいのである。次は東京リサーチセンターの企画調査室長と契約やぶりの池田ポリエチレンの部長との電話でのやりとりである。腹を立てるのは室長であるはずだが、得意先を保つには、おこるどころか、かなり丁寧な言葉づかいをしている。一方、謝罪すべき相手の部長は、かえって失礼な言葉をどんどんなげてくる（底線のある言葉に注意）。

室長 日程を延期してもよろしいんですが……。あ、そいじゃあのう、お宅のほかの製品についてなにか……。いかがでしょうか。実はあたくしどもも、手配済みなので、このままキャンセルされますと困るんですが……。

部長 だからね。きのう電話したんだよ。今ごろむし返してくるなんて。なに、きのう休んだ。しかしね、君がいなくなつて、ちゃんと通知は

しといたはずだよ。

室長 じゃ、あの……出席をお願いした方の、謝礼だけでもいただければ、けっこうですから、何か座談会をやらせていただけないでしょう
か。

部長 今ね、ほかにテーマはないんでね。キャンセルするよ。

室長 そんなふうに一方的におっしゃられても……。いえ、確認した上で、お願いしてますんですけど。

部長 くどいよ。や、女はね、だから……。

室長 あのですね。じゃあ、この仕事はキャンセルするとしまして、あのう……かかった費用と社員作業費1日分だけいただけますか。

部長 ああ、いいとも。(電話を切る)

話し言葉の四つ目の特色は音声表現である。発音や発声の強弱、アクセントの高低、イントネーションの緩急、抑揚の有無、区切りの間の選択、音調の転換などによって話した言葉の果たす役割も異なってくる。話す内容がいくら豊富で、価値があっても、子守歌のような音声では、あるべき効果が得られないだろう。スーパーの店内放送やテレビのコマーシャルの音声は普通のより何デシベル高いか分からないが、かなり高いのが事実である。そのねらいはほかでもなく、お客さんや見る人を興奮させ、正常の心理状態や冷静さを失わせ、人間本来の欲望をあおりたてることによって、衝動のもとに、判断せずにもものを買わせることにあるのではないかと思う。劇作などのセリフは音声などいちいち書かれていないため、役者が書き手の意図を理解しながらしゃべるのがふつう。どんなにすぐれた役者であっても、100%まで理解できることは難しいだろう。例えば、「お天気じゃないの」という文に対して、抑揚の違いによって、次の3通りの理解ができる。

- (1) (晴れを) 肯定する言い方
- (2) (晴れを) 疑う言い方
- (3) (晴れを) 否定する言い方

それぞれの抑揚は、

- (1) おてんきじゃないの（誰よ曇ってきたなんて言ったの！）
- (2) おてんきじゃないの？（雨が降ってきたなんて本当？ あら、そう
いえば……）
- (3) おてんきじゃないの！（雨になってしまったの！ 見れば分かる
じゃない！）

抑揚に対する理解によっては、ニュアンスのずれが生じるし、場合によってはまったく違った意味あいになる。

冗談であるが、ある金持の奥座敷に忍び込み、物や金銭をさらおうとする泥棒が、屋主の切り忘れていたラジオから流れているかわいらしげな音声に心をうばわれ、つい聞きこんで感動の末、何一つ盗めずに帰ったという話がある。冗談ではあるが、音声表現は大変重要だということは間違いない。

余談であるが、教師である私もいかに授業ムードをたてるかに関心を持っている。勿論、それにはいろいろな要素があるが、適当な音声表現で学生の注意を引くのも大事だと思う。何年も前のことだが、日本のある名高い言語学者が北京に見えて、日本語教育について講義してくれた。鳴り響いた名声なので、北京の各大学の日本語教師がわれ先に殺到した。しかし、講義がはじまってからまもなく、会場を埋めている人の半分以上も居眠りをしていた。そうでない人もいかにもつまらなそうな顔をしている。しかし、礼儀上、退場するわけにはいかなかった。別にその先生の講義の内容はつまらないというわけではない。まず声が小さすぎて、マイクがあっても全然聞き取れなかった。その上、表情がなく、抑揚がなく、まるでブンブン言う蚊のような音声なので、居眠りをしているのは無理もない。だが、その先生の論文や本を読んだら、まったく違った人のように、発想が鋭く、ユーモラスで活発なのである。

あいさつ言葉が多いのも日本語の話し言葉の大きな特徴である。あいさつ言葉が多いというのは、やはり交際を円満に進めるのに必要であろう。つまり適当でたくみなあいさつは一種の付き合うための潤滑油である。日本でマ

ンション生活をしていると、朝廊下やエレベーターで誰かと会ったら、きまって「お早ようございます」とあいさつされる。隣同士の人とは、まったく付き合いがないのは、外国人の私には不思議に思われるが、なのに「お早ようございます」とあいさつされることはもっと不思議なのである。

日本語のあいさつ言葉が多いのは大変良いことであるが、私のような文字を仕事としている人にとっては難しい。中国語にはもともと「お早よう」「こんにちは」「こんばんは」のような時間帯による三つのあいさつ言葉がなかった。北京あたりでは「おはよう」にあたる「你早」或は「您早」（ていねいな言い方）というあいさつがあるが、「こんにちは」と「こんばんは」に相当する言葉がないようである。いま、中国へ行ったら、いつでも、どこでも、誰とでも「你好」または「您好」（ていねいな言い方）で通用する万能あいさつ言葉があるが、英語や日本語のあいさつ言葉に対応するように、「お早よう」を「早安」或は「早上好」、「こんにちは」を「您好」或は「白天好」、「こんばんは」を「晚安」或は「晚上好」と訳されているのがふつう。人為的に作ったことばだから、パターンくさく感じられるので、外国の文学作品や映画などの中国語訳以外はほとんど使われていない。

日本人は食事の前に必ず「いただきます」と両方の掌を胸の前に合わせたてながら言うから箸をとるが、それはおいしい食事を与えてくれた神様や大自然への感謝の気持ちを、という意味だそうだ。中国人はそういう習慣はない。しかし、日本の映画などの中国語訳は「我吃了」と訳す。そのまま日本語に再訳すると「僕は食べるよ」になる。ままた文化の相違なので仕方のないことである。

話し言葉は省略が多いのも特徴の一つである。話の一部の省略は勿論のこと、助詞などもよく省略する。そして、「～ている」の「い」のような脱落もよくある。前にあげたお医者さんと患者の親族との会話例の中では、「するとガンは全部……」「それじゃ、また手術を……」「いや、これ以上やっても……」などは、それぞれ「取り切れなかったんですか」「しなければならぬんですか」「効果がないんです」を省略していたのである。ただし、話

の一部の省略といっても、主として述語の部分か、文末の部分である。しゃべらなくても相手が分かり、場合によってはわざと省略していて、相手にその省略の部分を補足させるという役割がある。患者の親族が「するとガンは全部……」と言っただけに、お医者さんは「いや、取り切れませんでした」と言ったわけである。

中国語の漢字は表意文字で、聞くところによれば、国連で使われている中国語、英語、フランス語、スペイン語、ロシア語とアラビア語という6カ国言語の中では、同じ内容の書類でも、中国語訳が一番短いという。つまり中国語は大変簡潔で少ない漢字でたくさんの意味を表現できる言語なのである。しかし、場合によってはかなり省略できる日本語のほうが字数が少ない。これは私の10数年前の経験談であるが、日本のあるえらい政治家が北京をおとずれた時、通訳を担当していた。ある日、中国側のえらい人がその政治家と会談する前、「先日はどうも」とその政治家はあいさつした。日本語の「どうも」はいろいろな意味がある。「どうも」という言葉だけを覚えれば、日本中どこへ行っても一応困らないと言われるほどの万能語である。つまり「どうも」の後に来る内容によって意味が違うのである。「ありがとう」くるのか「すまない」くるのか、それとも「うまくできない」や「変だ」などの内容が来るのかである。「先日はどうも」をそのまま直訳したら、全然中国語にならない。省略した内容を補って訳すべきである。それで「非常感謝您那天設宴款待我」(先日、宴会を催していただきどうもありがとうございました)と訳したのである。日本語の6文字に対して、中国語訳は12文字も使った。プロ文革の中、同じように訳したある通訳は、中国の造反して幹部になった人に、日本人は口をちょっと開いただけで、お前はなぜだらだらとそんなに長く訳したのか。この俺を騙そうとするじゃないかとしかられてひどい目にあった事件があったそうだ。

日本語の話し言葉は話の一部を省くほかに、助詞なども常に省略する。次は学校からの帰りに、女子中学生のAさんと雅子という女子中学生との会話の一節である。()の中は省略した部分である。

A あんた（は）札チョン族って知って（い）る。マコチャンのパパみたいなのが雑誌に出て（い）るわよ。

雅子 なあに、札チョン族って。

A 札幌チョンガーって（いう）の（が）多いんだって。見せてあげようか。

雅子 チョンガーって。

A チョンガーって、ひとりもんのことよ。

雅子 あ、そう。

話し言葉には省略が多いのは、合理化や効率化のためである。言葉が短くなって、情報交換が速やかに行なわれるからである。意識的にどこどこ、なになにを省くのではなくて、自然に不必要な部分を省くのである。

書き言葉とまた一つ違ったところは、話し言葉は感情やムードを借用することができる。言い替えると、コミュニケーションは、言葉だけではない。喜怒哀楽といった表情の変化や手足の動き、視線、相手との距離など「非言語」の表現もある。言語が論理的な情報を伝えるのに対し、非言語は主に感情を伝える。日本語には、目は口ほどにものを言う、以心伝心とかいった慣用語があるが、その説明にぴったりだと思う。

日本人や中国人のような東洋人は、感情を表情や身振りに出すことを控え、読み取ることに重点を置いている人種だとよく言われる。欧米人のようには、すぐ両手を広げたり、肩をいからせたりしながらノーノーと言うようなジェスチャたっぷりの表現はできない。しかし、若い世代には、一部の意思を非言語の表情やジェスチャーで表現する人が増えつつある。象徴的なのがJリーグ。サポーターたちの顔には、派手な欧美人の応援団のように、ペインティングし、思い切り声を上げ、体を躍らして応援する。手拍子をし、両手を開いて腕を上げるのは「エール」を送る気持ち。得点が入ると、肩を組んで体を揺らし「歓喜」を表す。怠慢プレーには、親指を下に向け、上下に小刻みに動かす。これは「不満」の表現である。サポーターたちの応援に選手もガッツポーズでこたえ、スタンドとグラウンドの気持ちが通い合う。議論は

ずれかもしれないが、Jリーグという言い方が93年度の流行語と選ばれたのは、日本人の伝統的なものとまったく違ったそのまあたらしさがものを言ったのではないかと思われる。

話し言葉は一目で見て話し言葉だと分かるのは、文体を除き、話し言葉は話し言葉特有の語彙や言いまわしがあるからである。次は夫婦二人の会話の一節で、Aは主人で、Bは奥さん（底線のあるところは話し言葉の語彙や言いまわし）。

A 自信がなきゃ、やめればいいよ。自信なんていうのは、やってるうちにできてくるもんじゃないのか。それにね、世の中一般の男ってのは、そうそう偏見のあるもんばかりいやあしないよ。女だろうとなんだろうと一生けんめいやっていてそれなりにできる者には、一目おくもんだよ。

B そう。うん、ま、とにかく2人の給料合わせて一人前って（いう）段階終わったんだし、やっと楽んなったところで、あたし、地位なんか欲張らなくてもいいのよ。

A それには、女のわたしできるだろうかって、そういうコンプレックスはだね。

B いえ、女とか男とか言うんじゃなくて。

A うん。いや、しかし、職業上の能力は、仕事を通して鍛えられるって、自分の口で言ってたじゃないか。

B 言うわよ。言うだけなら。そりゃあ継続することが大切だって信じてるわよ。

A うん。あ、そう。

この会話文から分かるように、話し言葉は文が短く、敬語やあいさつ言葉と命令、命令願望表現の多用、省略が多いほか、話し言葉としての語彙や言いまわしがずいぶん多い。かたい漢字語彙より、やわらかい大和言葉のほうが、話し言葉の語彙がずっと多い。日本の政治家の愛用する「驚愕」とか、「所見」とかいった言葉は若者たちは聞いて全部分かるだろうかと漢字国の私はいつも疑う。文章なら良いが、話し言葉では、やはり「驚く」とか、「意

見」とかを使ったほうが分かりやすいのではないかと思う。また、「はい」「うん」などの受け答えの言葉や相づちのことば、「あれっ」「あら」のような感嘆詞、「かしら」「わ」「よ」といった終助詞、「ちゃう」「とく」などの補助動詞、「たって」「けれど（も）」のような接続助詞などなど、いずれも話し言葉専用の語彙である。人間は話す時、とくに日常会話の場合、考える暇がないので、時々、「あー」「えー」「あの一」「まー」「えっとー」など意味のない言葉を連発して、空白の穴埋めや言葉さがしの時間かせぎをするが、それも一種の話し言葉であろう。話し言葉は話し言葉なりの語彙がまだまだ沢山ある。そのほかに、「んだ」「じゃないか」のような話し言葉専用の言いまわしも枚挙にいとまがない。

話し言葉の美しい話し方

日本語は敬語が非常に発達しているため、同じことでも話し手と聞き手の身分や地位、職業、親疏、内外と上下関係などによってさまざまな異なった表現がある。外国人の私は大学の研究室からいつも電話で事務局の方にタクシーを頼むが、実験的にいろいろ異なった頼み方を使ってみた。まず本件の前置きの言葉であるが、次の3組のを使ってみた。

- (1) すみませんが
- (2) 申し訳ありませんが
申し訳ないんですが
申し訳ございませんが
- (3) 恐れ入りますが
恐縮ですが
恐縮でございますが

それから実質的な内容について、次の4組の言い方を使ってみた。

- (1) タクシーを呼んでください。
タクシーを呼んでくれますか。

タクシーを呼んでくれませんか。

タクシーを呼んでくださいますか。

タクシーを呼んでくださいませんか。

(2) タクシーを呼んでもらえますか。

タクシーを呼んでもらえませんか。

タクシーを呼んでもらえないでしょうか。

タクシーを呼んでもらえませんかでしょうか。

(3) タクシーを呼んでいただけますか。

タクシーを呼んでいただけませんか。

タクシーを呼んでいただけないでしょうか。

タクシーを呼んでいただけませんかでしょうか。

(4) タクシーを頼みます。

タクシーをお願いします。

タクシーをお願い致します。

タクシーをお願い申し上げます。

結局、並べてある4組の頼み方はどちらもいけないというわけでもないようである。ただし、どれが一番ぴったり合うか、日本人の方に教えていただいても答えはまちまちである。つまり、4組の言い方は、話し手のたつ角度、聞き手に対する敬意の程度、ていねいさなど、それぞれニュアンスの差があるが、みんな使える。同じ組の異なった表現も丁寧さなどやはりそれぞれ少しではあるが、違っている。

一口美しい話し方といっても、話し手と聞き手による話し方の違いもあれば、話す場による話し方の違いもある。国会でのやりとりと道端での日常会話、酒屋の雑談と座談会での発言、夫婦げんかと商談などはみんな話し言葉を使うが、格調の違い、言葉使いの違い、雰囲気とムードなどの違いは天と地との違いと言えよう。

それがゆえに、美しい話し方とは、同じ条件、同じ場合においてのことを言うものである。ベストセラーが大量の読者を獲得できるのと同じように、

上手な話し方，うまい話術を自由に駆使して，聞き手に伝えたいことが伝わり込みとおってゆくだけでなく，相手に感動を与え，相手の心を打つことさえできるのである。日本語にも中国語にも，口達者に関することわざが沢山ある。たとえば，たて板に水を流すようによどみなくしゃべるとか，筋道をたてて言うとか，話す時に1分のすきもないとかいったものがそれである。勿論，その反対の表現には，口数が少ないとか，話す時，順序がめちゃくちゃとか，前後の話がちぐはぐで合わないとか，ひいては，出まかせにしゃべるというのがある。

美しい話し方を身につけるためには，最も大事なものは話し手の態度や人格のほかに，どんな場，どんな聞き手を相手に，どんな話を話すかを決めなければならない。その上に，それぞれふさわしい話し方を選ぶ。ふさわしい話し方というのは大変難しいが，それは前に述べた話し言葉のさまざまな特色を十分考慮に入れて工夫しなければならない。それは，適当な用語の選択，異なった敬語の使用，音声表現の技術，感情やジェスチャーの取り入れ，雰囲気やムードの形成，話全体の調和などなどである。また話す目的によっては，聞き手のペースに合わせるとか，相手の欲求に順応するとかいうように，たえず相手の反応を見て調整しなければならない。

話す内容は勿論のこと，話し方にはいつもユーモラスなもの，新鮮さ，リズム感，躍動感があって，聞き手に受け取られるようにというのも重要である。中国でのことであるが，ある仲のよい夫婦は大げんかをした。悔しくてたまらない奥さんが離婚届けに捺印をまでご主人に逼った。ちょうどその時，新聞社への投書をもどされてしまった。封を切ると，新聞社から原稿不使用の通知書が同封している。通知書は活字で，不使用の原稿が多すぎるためか，宛名に名前も書かなかった。「××様，ご原稿は確かに受け取りました。しかし，検討してみた結果，不使用となりますので，とりあえず返還させていただきます。これからも何とぞ宜しくお願い申し上げます。」という内容の通知書を読んでいるご主人は，インスピレーションをとみに受け，宛名のところに奥さんの名前を書き入れて離婚届けと一緒に奥さんにもどした。そ

れを読んだ奥さんは思わずクスッと笑い、悔しさもとんでしまったという。時にはユーモアの役割は大きいのである。

中国では、漫才はいつも各地の方言やなまりをまぜて、こっけいな話術で観客を喜ばせる。しかし、ビジネス社会では、日本と同じように方言に対しては拒否反応が強い。方言は中国語でも日本語でも話し言葉的な部分が多い。適切な場合、適当な対象に、方言のおもしろい部分を取り入れれば、話し言葉をもっと豊かにすることができるのではないかと思う。新聞によると、東京に進出した関西人経営のたこ焼き店があって、当初は店長の指示で接客のことは共通語でという申し合わせがあった。ところが、ついつい関西のなまりや言葉が出てしまう。それが意外に喜ばれ、いつのまにか、「おおきに」を売り物にすることになって、大繁盛が続いているという。

美しい話し方という課題を解決するためか、日本ではさまざまな話術向上の本が販売されている。大変いいことだと思う。

以上、日本語の話し言葉について、中国語のと対照しながら述べてきた。中国の外国語大学では、前の2年間は基礎段階と言って主に話し言葉を中心にして学ぶのがふつうであるから話し言葉の特徴や美しい話し方の要領などは、教師は教える立場から学生は習う立場から十分に考えるべきだと思うのである。

参 照 資 料

- 1) 《話しことば書きことば》井口虎一郎編
- 2) 《現代文法の特質・その将来》佐治圭三
- 3) 《日語的敬語及其周辺問題》姚莉萍
- 4) 《実用口語》陳国民・李首鴻主編